ピエリオ・ヴァレリアーノ著『学者たちの不幸』を読む
——ヒューマニストたちの運命——

根占　献一

はじめに

中世から近代に移行する時代は、思想・芸術史上、ルネサンスと呼ばれる。この頃のイタリア諸都市は独立した国家として独自の文化を誇った。たとえば、フィレンツェとパドヴァの両都市は、それぞれフィレンツェ共和国とヴェネツィア共和国の中心地であった。フィレンツェは共和精神と「プラトン・アカデミー」の町として、そしてパドヴァは大学都市として、イタリア内外の同時代人の関心を惹きつけ、訪れ、学ぶ者は多かった。両都市の異なる特徴はルネサンス思想を考察するうえで意義深く、前者は「市民的」ヒューマニズムとプラトン主義に、後者はアリストテレス主義の問題に深く関与する。

これに対し、ローマはどうであろうか。この都市は「永遠の都」としばしば俗称される。ここに、この都市を理解するうえでの陥穽がないであろうか。紀元前から栄え、地理学的にローマは常にローマである。だが、長い中世の間、皇帝はこの地にはいなかった。教皇もまた、ルネサンスの直前、あるいはその前史において不在の期間がしばらく続いた。所謂アヴィニョン教皇時代である。のみならず、教皇たちが並び立つシスマの時代もあった。15世紀に入ってからも、公会議派の勢力は留まるところを知らなかった。ローマが教皇の住む町となるのは、マルティヌス５世からであるが、公会議派の力に押された教皇エウゲニウス４世もフィレンツェに長く滞在することを余儀なくされた。このため、近代ローマの始まりはこのあとのニコラウス５世からと言ってもいいであろう。ジャンノッツォ・マネッティの同教皇伝はその頃を知る傑作で、興味深い記述に満ちている。ヴァティカンの建造物を伴う、ローマの発展する姿をここに見ることができる[1]。

こうしてローマ・ルネサンスの理解にはまた、先の都市とは異なる視点が重要となろう。それはキリスト教世界の一大中心地としてのローマである。当地には教皇領国家を

---

[1] Giannozzo Manetti, *Vita di Nicolò* V, traduzione italiana, introduzione e commento a cura di Anna Modigliani con una premessa di Massimo Miglio, Roma 1999.

率いるローマ教皇が君臨してイタリア内外の国家と競合関係にあるだけでなく、神聖ローマ帝国皇帝とは二大覇権を担う間柄にあった。15世紀末以来のフランスの度重なるイタリア進出は、フィレンツェ共和国の正義の旗手やヴェネツィア共和国の統領（ドージェ）とともに、ローマ教皇に、アルプス以北の両大国間の困難な外交舵取りを切らせることになる。特にこの教皇にメディチ出身者が就いた場合には、フィレンツェの覇権を巡って、メディチ派と共和主義派の対立が問題となる。

そのような時代を見るうえで数多くの史料と研究文献には事欠かない中、割と知られていず、また知られているとしても、この作者の高名な作品から先入見が生じやすいものといえば、ヴェネツィア共和国ベッルーノ（Belluno）出身、ピエリオ・ヴァレリアーノ『学者(文学者)たちの不幸』（*De litteratorum infelicitate, libri duo*, Venezia, 1620）ではなかろうか。今NACSISで調査すると、『ヒエログリフィカ』（*Hieroglyphica*, Lyons, 1620[New York, 1976]）は現代語訳を含めて日本の大学図書館にかなり収蔵されている。これはこの国における図像学研究の隆盛と少なからず関わるであろう。

私自身がピエリオ・ヴァレリアーノ（Pierio Valeriano, 1477－1558）の名を強く記憶に刻まれたのは、エドガー・ツィルゼルの研究書を読んだ時であった。かれこれ30年前の昔である。懐かしさも手伝って、この書を私は小著の一冊で引用した[2]。この一世代間、この書に接近する機会はほとんどなかったが、インターネット時代を迎えて古書の入手が容易と化し、また英語対訳版が現われたために、非常に身近な著作になった[3]。そこで本論ではこの対訳版に基づき、全2巻からなる『学者たちの不幸』の内容案内を試みたい。なお対訳版編纂者Julia Haig Gaisserはカトルス研究でも知られる古典学者で、古代ローマ詩人のルネサンス時代の読解研究に学術的貢献を果たした[4]。

(一)『学者たちの不幸』第1巻

書の冒頭は次のように始まる。「最近、教皇（Pontifex Maximus）クレメンス７世逝去の根拠のない噂として評判が広がり、彼の甥たち、イッポーリトとアレッサンドロがこの上ない速さで旅路を急いでローマを目指した時に、私は（メディチ一族の）家人の随行者とともにもっと緩々と追って、この都市に入ったのだが、その翌日、私が青年初

---

[2] Edgar Zilsel, *Die Entstehung des Geniebegriffs. Ein Beitrag zur Ideengeschichte der Antike und des Frühkapitalismus*, Hildesheim/New York, 1972(1926).『共和国のプラトン的世界』創文社、2005年、注87頁80番。同書本文89頁では『文学者の不幸論』と訳題をつけている。

[3] *La infelicità dei letterati di Piero Valeriano ed appendice di Cornelio Tollio*, Milano, 1829. Julia Haig Gaisser, *Pierio Valeriano on the Ill Fortune of Learned Men. A Renaissance Humanist and His World*, Ann Arbor, The University of Michigan Press, 1999. 以下、数字のみで書の指示なきものはこれによる。

[4] Eadem, *Catullus and His Renaissance Readers*, Oxford, 2001(1993).

期から絶え間なく崇めてきた、天賦の才、学識、それにまことに最高の知恵を持つ、この高名な人物、ヴェネツィア共和国大使ガスパロ・コンタリーニ（Gasparo Contarini）を訪ねることよりも、もっと大事なことはなかった」、と[5]。この書き出しから、いつの時代のどのような状況下なのか、また著者の生き様が見えてくる。メディチ家出身の教皇の命が危なかったのは1529年１月であった。北イタリア出身のヴァレリアーノはメディチ家の若様に仕えていた。同月10日、イッポーリトは死期の迫る教皇により枢機卿に任じられ、ヴァレリアーノは彼の秘書官となった[6]。奉仕していた一族の教皇が危篤状態にある時に、ヴァレリアーノには好機到来とヴェネツィアの高官と会う機会を逃すまいとした。

だが、訪ねると、コンタリーニは不在であり、ローマの７大教会の巡礼に出ていた。時はちょうど四旬節(quaresima)にあたっていた。７大教会とは、聖パウロ・フォーリ・レ・ムーラ、聖セバスティアーノ、聖ジョヴァンニ・（イン・）ラテラノ、聖クローチェ、聖ロレンツォ・フォーリ・レ・ムーラ、聖マリア・マッジョーレ、聖ピエトロの各聖堂を指す。このヴェネツィア貴族はなぜローマにいたのか。教皇への派遣大使として、神聖ローマ帝国皇帝カール（カルロス）５世を説得してヴェネツィア陣営に加入させるとともに、教皇が領地として要求するヴェネツィア都市、チェルヴィアとラヴェンナを断念させるためであった。1530年にはコンタリーニの外交努力も空しく、教皇はボローニァで皇帝を戴冠し、両都市は割譲の憂き目にあった[7]。

コンタリーニが留守であることを知り、ピエトロ・メッリーニ（Pietro Mellini）を訪ねようとするが、このとき、ロレンツォ・グラーナ（Lorenzo Grana）とアンジェロ・コロッチ（Angelo Colocci）に会うことになる。彼らもまたコンタリーニを訪問するところであった。訪問の目的を聞く中で、彼らは前の日もコンタリーニと会い、学識者が時代の不運と不幸に遭遇するために生まれてきたのではないかという疑念を、彼から払拭させられたことが明らかになる。コンタリーニとの対話の一部始終を、順を追って聞きたいと、ヴァレリアーノが願う気持ちを察して、メッリーニ家に向かい、ここの中庭に場面が移ってゆく。メッリーニもまた、不十分ながら、ジョヴァンニ・アントニオ・ポッリオ（Giovanni Antonio Pollio）からその会話を伺っていたので、全体を知りたいと願っていたところであった[8]。

グラーナが昨日、コロッチ、ポッリオとともに会った際のコンタリーニの話の内容を

---

[5] 80.
[6] 19-20（Gaisser序論）. 教皇は一命を取り留めて34年まで生きる。
[7] 57-58（Gaisser序論）.
[8] 80-85.

物語ることになる。ポッリオの発言も、グラーナが行なう。これによると、いずこの町よりもあまたの学者を生み、また招いて育てたローマに、1527年のローマ劫略によってもたらされた悲劇が話題になっていることが明らかになる[9]。クレメンス７世も命からがら、その年の暮にローマを脱出してオルヴィエートに難を逃れた。ローマに戻ったのは10ヵ月後であった。そのような教皇に使節代表として付き添っていたのがコンタリーニであった。このようなローマにやってきた知識人は、以前と同様、「哲学者たち、雄弁家たち、詩人たち、ギリシアやラテン文学の教授たち」[10]との出会いを求めていた。劫略事件によってもたらされた学者の断末魔がその口から語られるものの、知識人たる対話者などの存在に、コンタリーニは一定の安堵感を抱いた。

一般的に、ヴァレリアーノの作品はこの大事件による学者の惨状が主題であるとされるが、コンタリーニと同郷のアキレイア総大司教エルモラオ･バルバロの悲劇も、対話の中で語られる。それは15世紀末の出来事でローマ劫略とは無関係であり、ローマ教会とヴェネツィア国家間の相剋が、コンタリーニ同様、大学者であるバルバロの運命の暗転として、ポッリオが指摘することになる。さらにポッリオは、劫略に際してスペイン人に殺されたクリストーフォロ・マルチェッロのことも語りながら、やはりこの事件に無関係なカミッロ・ポルツィオ（カミッロ・ポルカーリ）とマルコ・ムスロの最期も紹介している[11]。

セーニ司教であるグラーナは次に枢機卿アドリアノ・カステッレージや同じく枢機卿アルフォンソ・ペトルッチの、特にレオ10世との対立を取り上げる一方、メディチ家の不運、不幸、レオ10世の親族たちの命運、若死にに言及する。ここでもまた、ローマ劫略と関係はない。余りの悲運に語る人も黙し、聴く側も黙ってしまう[12]。この沈黙を終わらせたのはポッリオであった。彼の語る話はもっと古い話で、ハンガリー王マッティアス・コルウィヌスの恩顧を失った、クインクエエクレシアエ司教ヤヌス･パンノニウスの哀れな最期であった[13]。グラーナが再びアッコルティ一族の病魔を語り、学問に秀でた者たちの変わらぬ運命に考えさせられる[14]。またアントニオ・マロスティカ（マッテアッツィ）も同じく伝染病で亡くなったため、書籍を含む持ち物一切が焼却された。病気感染を防ぐためとはいえ、研究者には堪らぬ処置であった。ポルトガル人のロドリゴの若死にも似たようなものであり、ナポリ貴族ジローラモ・カルボーネも同じことだ

---

[9] 86-89.
[10] 88.
[11] 92-95.
[12] 95-101.
[13] 101-105.
[14] 104-107.

った[15]。この文脈で、ロドリゴがイベリア半島に使節としてきたエジディオ・ダ・ヴィテルボと会ったこと、カルボーネがポンターノやサンナザーロ（アクティウス）から評価されていたことが言われる。

さらにピエトロ・グラヴィーナが伝染病のため友から見捨てられたこと、ジョシフォンテの数奇な運命のこと、エルコレ・ストロッツィやジョヴァンニ・レジョ、コドロ・ウルチェオ、ムティウス・アレリウス、パオロ・ボンバチェ、ドナト・ポッリオの悪運のことが次々に紹介される。彼らは有為な人物ながら、殺された。ボンバチェはまさにローマ劫略に際して命を落とした[16]。

ドナト・ポッリオがローマ大学の教授であったために、以下、アントニオ・フラミニオ、アントニオ・アミテルニーノ、アウグスト・ヴァルド、ジャノ・パッラシオ、トンマゾ・フェドラ（・インギラミ）、カミッロ・パレオッティ、小フィリッポ・ベロアルドなど、同大学関係者の悲劇が語られる[17]。中にはボローニャ大学からローマに移ってきた人もいる。それでもここでもまた、必ずしもローマ劫略とは繋がらぬ人が多く、フェドラ・インギラミの場合には現代風に言えば、交通事故に遭った観がある話で、それは彼の有名なエクスヴォート（奉納物。聖ジョヴァンニ・ラテラノ聖堂美術館蔵）に残っている。

今度はコンタリーニが、北イタリアのマルカントニオ・サベッリコ、ジョルジョ・ヴァッラ、ジョヴァンニ・カルフルニノを語ることで、ローマの場合と同様に哀れな急死に言及する。ヴァッラのみを取り上げると、彼はキケロの『トゥスクルム荘対談集』を講義し、霊魂の不滅を熱心に論じているときに突然死を迎えた。この苦しみを伴わない死を幸運な例に数える人がいるが、キリスト教的見地からコンタリーニは否定する[18]。さらに、ヴァレリアーノの故郷ベッルーノの話が出、教師として著名なジョヴァンニ・バッティスタ・エニァツィオが物語る形に変わる。その中で、ジョシッポ・ファウスティーノの悲劇が取り上げられるとともに、ガレオット・ダ・ナルニの落命が言われる。ガレオットの場合は肥満体による下馬の失敗であるから、やや滑稽な死に方となっている[19]。

ここでポッリオがコンタリーニにヴェネツィアのパオロ・カナルのことを語って欲しいと求め、これにコンタリーニは応じて、プトレマイオス『地理学』の翻訳と研究で知

---

[15] 106-109.
[16] 110-115.
[17] 116-121.
[18] 120-123
[19] 124-127

られるカナルの夭折に触れる。カナルは宗教上も申し分なかった人物と紹介されてもいる[20]。

こののち、コンタリーニは同郷のニッコロ・アンジェリコ、マッテオ・アルビノ、ジロラモ・ダ・ペザロ、ジョヴァンニ・カンパニを紹介する。この話の中でしか知られていない人物も含まれて興味深い。最後の人物はヴェネツィアとパドヴァで学び、医業を生業とし、ベリ地方ブールジュのイタリア商人たちの間で働いていたが、後には、ローマの「人々の光輝の中で生きようと、ローマに移住し」、「自然的事物の問題を鍛え上げ」る心積もりだった[21]。さらに、悲劇的最期を迎えることになる、医術に関わる学者が語られていく。学者には綺麗過ぎる妻をもらったベルナルディーノ・カムジ。アラビア医学を究めようとしたアンドレア・モンガイオ。ジュリオ・ドリオニの変転極まりない人生。マルカントニオ・トッリアーニの場合は、ヴェネツィアとカンブレ同盟間の戦争のため、パヴィアに移住することになるが、そこで高熱に襲われ、死去する。熱病では、次に若くして世を去ったジョヴァンニ・コッタの話が来る。年に不足はないものの、ダンテ・イル・テルツォ・アリギエリの場合も紹介される[22]。ついで、ジローラモ・ボロニ、ジャコモ・パガニ、ジローラモ・ドナト、ガブリエレ・ゼルビの話に引き継がれる[23]。統領として著名なアンドレア・グリッティ時代に関わるゼルビの体験はかなり詳細に紹介されている。ローマ教皇シクストゥス4世との論争やイスラム地区での活動はなかなか興味深い[24]。

今度はコロッチが発言し、延々と自殺者を羅列していく[25]。この死はこれまで語られてきた死の原因よりも、はるかに悍(おぞ)ましいものであることが力説される。事例は古代からも引かれ、デモステネス、カトーの名が出る。それは宗教的にも受け容れ難いことが示唆される[26]。次いで、マルコ・カバッリーノ、ロレンツォ・ロレンツィ、ピエトロ・レオーニ、ジョヴァンニ・バッティスタ・アルビーノ、フランチェスコ・フォルトゥニオ、ジュリアーノ・ダ・カメリーノ、ジョヴァンニ・ヴァルデジオと続く[27]。「言語文献学者」(grammaticus) ジュリアーノ・ダ・カメリーノの話はローマ劫略と直結する。彼はレオ10世の甥で枢機卿となるインノチェンツォ・チボを教えるべく、雇用されてい

[20] 126-129.
[21] 128-133.
[22] 132-137.
[23] 136-139.
[24] 138-143.
[25] 142-157.
[26] 142-143.
[27] 142-147

た[28]。スペイン人ジョヴァンニ・ヴァルデジオ（フアン・バルデス）の場合は婚約に纏わる話で、相手の女性はマルカントニオ・アルティエーリの娘であった[29]。そして最後に、コンタリーニと同郷で貴族のフランチェスコ・プリウリの自殺の試みが詳述される。この人物は占星術に秀でていて、レオ10世、特にアゴスティーノ・キージに気に入られたと紹介されている。気が狂れたらしく、キージは自害を阻止するよう召使に言い聞かせていたのだが、甲斐は空しかった。窓から身を投げ、即死には至らなかったものの、瀕死状態に陥る。キージの命でローマに運ばれた。レオ10世の侍医シチリア人のフェルディナンド・バラミが呼ばれる。バラミとヴァレリアーノの懸命の努力にもかかわらず、プリウリは水さえ摂ろうとしなかった[30]。「まことに堅忍不抜この上ない5日間の断食の果てに憔悴し、涙に暮れる、他でもないピエリオ（・ヴァレリアーノ）の腕の中で息果てたのであった[31]。」

この話に嘘偽りがないことがヴァレリアーノ本人から保証される。そこに外来の少年から、枢機卿アゴスティーノ・トリヴルツィオからグラーナへのある重要用件が伝えられる。フランスからの急便である。そこで、翌日、間接的ながらコンタリーニを交えたこの種の談話が再開されることが約束され、散会となる[32]。

(二)『学者たちの不幸』第2巻

冒頭で、ふたりの人物、トンマーゾ・ピエトラサンタ（Tommaso Pietrasanta）とジョヴァンニ・マリア・カッタネオ(Giovanni Maria Cattaneo)が加わることが示される。そして早速、前者ピエトラサンタのもたらす情報が昨日の最後の節と関わることが明らかとなる。それはアンドレア・ナヴァジェロのフランスでの客死である。コロッチは彼の死だけでなく、これに先立つが、しかし同年1529年のバルダッサーレ・カスティリオーネのスペインでの客死にも言及し、イタリアの文化的損失が続く禍に言及せざるを得ない[33]。それでもコロッチは学者の悲劇を物語ることで、昨日の談話を再開しようとする。すると、カッタネオが発言し、どのような人物の悲惨な状況が語られたかと問う。コロッチは長くなってしまうので、昨日の細部は別の機会に自分たちに訊くことを求め、

---

[28] 146-147.
[29] 148-151. アルティエーリについては、根占献一『ルネサンス精神への旅』創文社、2009年、注58頁2番。
[30] 150-157.
[31] 157.
[32] 156-159.
[33] 160-163.

今日の話題に移っていく[34]。

コロッチは、ローマに生まれようが生まれまいが、われらとわれらのムーサイたちとあり、この共通の祖国を自らに選んだ者たちはローマ人であると宣言したのちに、シエナ出身のバンディーニ・プロレメーノの話をする。その中で、同じく若死にした、既出のパオロ・カナルの名が出、昨日の続きであることが示される。彼に劣らず、才豊かであり、その死を惜しまない学者はいなかった。同じく学識に満ち満ちた実弟ラッタンツィオを残したが、シエナ人もローマのアカデミーもただ悲嘆にくれるばかりであった[35]。次いで、ローマ人の間で著名なニッコロ・デッラ・ヴァッレの、そしてカメリーノ出身者でローマ・アカデミーの賞賛を得たバルトロメオ・タルドーロの早世に言及する。そしてこのバルトロメオの父、ルーカの、ローマ劫略との痛ましい出会いも添えられる[36]。

さらに、同劫略の難には遭わなかったフランチェスコ・パルミエーリの不運に言及したあと、モデナ出身の学識ある能吏ジョヴァンニ・フランチェスコ・フォルニの若死にが語られる。マントヴァの枢機卿エルコレ・ゴンザーガに従い、劫略後、教皇クレメンス７世が難を逃れたオルヴィエートにやってきたが、重病に陥り、帰らぬ人となった、と[37]。ギリシア人でギリシア学芸の復興に貢献したデメトリウス・カルコンデュレスの祖国喪失の話に移り、その娘テオドラのジャノ・パラッシオとの結婚に言い及ぶ。そしてこのジャノはレオ10世によってローマ大学の教授となり、テオドラの生活に支障がないようにした、と。ところが、カルコンデュレスの息子たち、テオフィルス（ヤヌス・ラスカリウスの教え子）の殺害と、バシリウスの病死が語られる。若死にしなければ、どんなに立派な学者になったことかと、ひとしきり、運命を嘆く。バシリウスとムスロ（既出）が去ったあと、ギリシア人で学者としての名声を保ったのは、ラスカリスだけとなった。その彼も病気には苦しめられたと言い添えられる[38]。

次に、ローマを舞台にしたベルギー出身――文中ではGermanogallusとある――のクリストフ・ドゥ・ロングィユに纏わる名高い事件が登場する[39]。かつてフランス国王聖ルイ９世を讃えたこの外国人に、ローマ市民権を付与することの意義が問われ、賛否両論、学者間を二分することとなる。その中で、ピエトロ・メッリーニ兄弟の悲劇が語られる。兄ジローラモの病による夭折に次いで、ロングィユに激しく抗弁した弟チェルソ

---

[34] 162-165.
[35] 166-167.
[36] 166-169.
[37] 170-173.
[38] 172-175.
[39] Th. Simar, *Christophe de Longueil humaniste (1488-1522)*, Cornell University Library, 2000(1911). 特に62-74.

の悲しい結末である。この才豊かな雄弁なる外国人もまた、パドヴァで早死にする。ピエトロは、7年余り、弟の死（1519年とされるが、対話の時代と合わない）から経過しているにもかかわらず、表情が青ざめたと描写され、トラウマが残っていることが明らかとなる[40]。

次いで、カッタネオの発言となり、同じく若死にする弟子ジョヴァンニ・ボニファツィオ・ヴィットリオの、ローマ劫略との遭遇、そして逃げ口を探す中、ルカニアに向う船上での病気感染の話となる。ルカニア海岸沿いの彷徨の中で多くの犠牲者が出、教え子も例外でなかった。師は優れた弟子のために墓標のみを立て、その死を悼む詩を書いた。これに対しピエトラサンタが、ピエトロ・アルチョニオの文体をカッタネオは認めていないのではないかと、口を挿む。カッタネオはコロンナ一族との関係を踏まえてアルチョニオの人間性を問題にして反論している。次に、クリストーフォロ・バッティの場合には、パルマでのフランス軍侵略や伝染病に遭遇するさまが描かれ、感染を恐れて、不滅となったかもしれない著作が焼却されたという[41]。このような話は前日にも出てきた。

さらに三人の悲劇が語られる。「言語文献学者」（grammaticus）のダニエレ・カエタニは主君フランチェスコ・マリア・スフォルツァと運命をともにし、タッデオ・ウゴレットはハンガリー王マッティアスの死後、貧困に泣き、ステファノ・ネグリも困窮に苦しんだ。彼らはともにポー川流域の人たちである。父親が北伊ブレッシャ出身と言われるアンドレア・マローネの名も忘れられていない。詩人として有名であったが、ローマの惨状に出くわし、哀れな死を迎えることになる。そのなかで、自分の書き物に対する運のなさに苦悩の限りを味わったのである[42]。

ピエトラサンタによりトスカーナでの悲劇が除外されていると指摘され、メッリーニはそれに気づいていて自分が語る役を務める気があったが、その任は彼の役割となり、発言しだす。最初に取り出される人物は、ロレンツォ・イル・マニフィコの長子ピエロである。祖国フィレンツェを追われ、帰還の望みを抱きながら、溺死に至るまでの過程が描かれる。水死の観点から、次に兵士であるとともに詩人として名を馳せたマルッロ・タルカニオタが来る。その中で、マルッロを謳うヴァレリアーノの詩が朗誦される。マルッロの父は、コンスタンティノポリス陥落（1453年）後に亡命したギリシア人であった。このマルッロとの激しい論争でも知られるアンジェロ・ポリツィアーノが登場する。ポリツィアーノはイル・マニフィコのお気に入りの学者で、その子息たちの家庭教

[40] 174-177.
[41] 176-183.
[42] 182-187.

師を務めた。彼に関しても、ヴァレリアーノの著の主題からその死に言及するが、性癖として同性愛に触れている点が目を惹く。同じく学者ながら、フィレンツェ共和国の書記局官長マルチェッロ・ヴィルジリオに話題が移り、事故で発語が不自由になり、公生活に支障を来たすことになったという。ここでは人生の悲哀が語られている[43]。

悲哀の観点ではジローラモ・マッサイーニも同様である。君主の恩顧を当てにせずに生きていたが、ローマ劫略に巻き込まれ、悲しみに圧倒される。その中で救われるのは、フェルトレ司教トンマーゾ・カンペッジョとの出会いであった。シピオーネ・カルテロマコの場合は、コロッチやレオ10世、その従兄弟ジュリオ・デ・メディチ（後のクレメンス７世）と友人に恵まれていたが、ピストイアで急激な発熱に襲われ死去した。メディチ家のこの二人との関係がジョヴァンニ・ルチェッライでは指摘される。枢機卿の地位に就けずに、運が味方せず、やはり熱を発し、亡くなった、と[44]。教会政治の点では、サンタンジェロ城代ジョヴァンニ・フランチェスコ・デッラ・ローヴェレもルチェッライに似ていよう。ユリウス２世と同族で枢機卿位が楽しみだったが、教皇が亡くなってしまう。次のレオ10世からも将来性を期待されたが、今度はデッラ・ローヴェレ自身が若くして死を迎える[45]。

同胞市民ピエトロ・マルテッリに話題を転じ、ギリシア語・ラテン語のみならず、ヘブライ語にも応えられる能力を有し、気品ある書簡を認め、見事なエピグラムを草したと言われる。ただ、病に苦しめられ、学識豊かな書が未刊のままに遺された。クレメンス７世に仕える息子のブラッチョが遺言に従い、数学（占星術mathematicae disciplinae）に関する精確を極めた著作を完成し、ローマ劫略から守ることができた。しかし、それらがピエトロ・アルチョニオ（既出）の手に落ちたとき、再び日の目を見ぬように、発刊を抑えられた、と。同じくトスカーナ、アレッツォ出身のジェリオ・ヴァルダンブリノは、今教皇座に就くジュリオ・デ・メディチに目をかけられたが、急死した。チッタ・カステッロの主ヴィテッロ・ヴィテッリは軍人でありながら、ラテン語とギリシア語ができ、道徳哲学、歴史学、宇宙誌などに関心を有していた。ヴィテッリが奉仕するクレメンス７世（ジュリオ・デ・メディチ）側がコロンナ家と戦う中、これまた急死した。急逝に対し、今度は裏切りの廉で残酷な死を与えられた若者二人が取り上げられる。ジュリオ・デ・メディチに対する陰謀を働いたヤコポ・ギアチェットとオラツィオ・バリオーニを風刺したアルメリコ・ミニアーティである[46]。

---

[43] 188-195.
[44] 194-199.
[45] 198-203.
[46] 202-205

「コロッチが、ローマを自らのために共なる住まいとして選んだ者たちをローマ人と呼んだのに従って、私は同じ理由で、文学あるいはほかのことにフィレンツェで進歩した人たちをトスカーナ人に加えようが、優れた二人のピーコ・デッラ・ミランドラとジローラモ・サヴォナローラはその中に入ろう」と述べ、まずピーコについて語る。それは九百の論題で嫌疑をかけられ、アレクサンデル6世に許された、有名な出来事のことになる。だが、ピーコは煩悶し、世を厭って亡くなったとされる。その同じ教皇と対立したサヴォナローラは自分が神に選ばれた人であると公言したが、それは虚偽であるとされて焼き殺された、これまた名高い史実が紹介される[47]。

ここで、メッリーニはたくさんの学者殺しを見たコルシ（Corsi）の言を聞きたいと提案。これに対し、コロッチが賛同を表明した。そこでコルシの発言となる[48]。「激越な死の類いで片付けられた」好学の者たちとして、早速名が挙がるのがペーザロのパンドルフォとアンコーナのチンツィオである。前者はヴァレンティノ・チェーザレ（チェーザレ・ボルジァ）により絞首刑に、後者はその父教皇アレクサンデル6世やユリウス2世に苦しめられたことが言われる。チンツィオの死はさらに、ファーノのオッタヴィオ・クレオフィロが、嫁資で騙した義父に毒殺される非業の最期を思い起こさせる。不当な死は、カルピの君主アルベルト・ピオに仕えていた、同地のシジスモンド・サンティも同様である。ヴェローナからトレントに大使として赴く途中で、金銭目当ての道案内人に殺害された。チェーザレ・サッキはトリヴルツィオ家と親しい間柄であったが、急死した。ラヴェンナのファビオ・カルボは老齢の身でありながら、ローマ劫略の難にぶつかった。赤貧ゆえに解放される手立てもなく、惨めな死が待っていた[49]。

しかしファビオは、印刷出版業者ミニチョ・カルボの配慮により著作が世に出た分、運がついていたが、ガザのテオドルスは報いられなかった。アリストテレスの『動物誌』（*Historia animalium*）に関する、灯下での、無比に近い仕事（divinae propemodum elucubrationes）——教皇シクストゥス4世に献呈された——がもたらした報酬はわずかであり、これをテーヴェレ川に投げ捨てる挙に出た。そして学問の顧みられぬことに哀しみ、衰弱した。この点では、ウルビーノ公ロレンツォ・デ・メディチに攻撃された、ファーノのジャコモ・コスタンツィも変わらず、著述が失われることに苦悩して果てた。ダルマティアのトリフォーネの場合は、人間不信、人間嫌いが拍車をかけ、悲劇となっ

---

[47] 204-207.

[48] 206-207. ピエトル・コルシはここでいきなり現われた人物である。またヴァレリアーノは、メッリーニの言をピエトロサンタの提案と記している。Gaisserによると、これは著書が未完の証拠である。207ns,116, 117.

[49] 206-213

た。彼はヴェネツィアにてジローラモ・ドナのもとで訓育され、アルベルト・ピオの講莚に列したのだったが[50]。

ヴェネツィアが出たところで、ドメニコ・サッラントニオの名が出る。サッラントニオはマルカントニオ・サベッリコのもとで学を修めた。この地を襲った伝染病と戦争により狂乱に陥り、当地の学識者たちの悲しみのうちに死去した。バルトロメオ・レオニコ・トメオはカンブレ同盟戦争の故に難を避けたものの、アリストテレスの翻訳で知られる兄弟ニッコロ・レオニコと違い、高熱に襲われて死去し、仕事を完成させるには至らなかった。パドヴァ出身で、ローマでのエルモラオ・バルバロとの友情で知られるガレアッツォ・ファチーノはベッルーノやトレヴィーゾで司教を務めたが、病に苦しめられ、悶死した。ヴェネツィア出身のニッコロ・ジュデッコは、ヴェネツィアではアルド・マヌツィオの、ローマでは当地のアカデミーの知識人たちと親しい交わりを結んだものの、ローマ劫略で惨死するに至る[51]。

次に、ローマの学者に転ずる。著名なローマ大学教授でアカデミーを率いていたポンポニオ・レートも極貧のうちに亡くなり、友の援助がなければ、葬式も挙げられないところだった。このような死は、ローマ劫略に泣かされたマルカントニオ・カサノヴァも迎えたところであった。ドイツ人のゲオルク・ザウアマンもこれに遭遇、乞食となって野垂れ死にした[52]。

ドイツが出たところで、16世紀前半のローマ・アカデミーを考えるうえで極めて重要な人物の名が登場する。「どうしてヨハンネス・ゴリッツ（ラテン名コリキウス。ゲリッツ）が文学者のなかに算入されないのでしょうか」、と。ユリウス２世からクレメンス７世のローマ教皇庁宮廷にあって、性格も学問もこの人ほど申し分のない人はいなかった。トラヤヌスのフォロに気持ち良い庭園を有し、アカデミーの面々に、また文学に令名を馳せた人々にこれが捧げられていた。また聖アンナの祝祭には集まりがあり、詩作競技が実施された[53]。聖アンナの祭日は７月26日であり、ナヴォナ広場に近いサンタゴスティーノ（聖アウグスティヌス）聖堂内のゴリッツ礼拝堂で執行された。サンタゴスティーノ隠修士会会長エジディオ・ダ・ヴィテルボはこの教会に関わる同時代人である。現在、ここに私たちは、ラファエッロの≪預言者イザヤ≫とアンドレア・サンソヴィーノの≪聖アンナと聖母子≫に時代を偲ぶ縁として、ルクセンブルク出身者の名とと

---

[50] 212-215.
[51] 213-219.
[52] 218-221.
[53] 220-221.

もに、これらの見事な作品を鑑賞することができる[54]。ゴリッツはローマ劫略に遭遇し、貧窮に泣く破目となり、ローマを脱してヴェローナに行き、司教総代理カリスト・デアマデイスの恩顧を受けたが、死去した[55]。

ローマ教会関係者、またローマ大学で教鞭も取ったアンジェロ・チェージと、枢機卿となるその子パオロの運命が同じくローマ劫略事件との関連で語られる。それはローマ・アカデミーが遭遇する難事である。ここから時代を遡って、ポンポニオ（・レート）、カッリマクス（フィリッポ・ブオナッコルシ）、（ジョヴァンニ・フランチェスコ・）ポッジョ、プラティナの名が出てくる。教皇パウルス２世への反逆罪の廉で拷問にかけられ、ある者は投獄の憂き目に遭い、亡命を余儀なくされ、また別の者は高い身代金を払って解放されたのだった。ハドリアヌス６世（オランダ人）が教皇に即位しても、知識人には碌なことはなく陰鬱な状況が続いた。野蛮なゴート人時代の再現であった[56]。

ポンポニオ・レート及びアンジェロ・コロッチ、ヨハンネス・ゴリッツのローマ・アカデミーとそれぞれ関わる、ベルナルディーノ・カペッラの病苦、シエナ出身の富豪アゴスティーノ・キージに惜しみなく支援された、ヴィテルボ出身のコルネリオ・ベニニョの実らぬ恋が、話題として続く[57]。このあとは、ピエリオ・ヴァレリアーノとの師弟関係などがあるためか、デッラ・ローヴェレ一族の一親子、バルトロメオ・グロッソとジョヴァンニ・バッティスタの話が長々と語られていく。学問への嗜好と能力があるにもかかわらず、資金のうえで問題ない父親はこれに無理解で、子は別の仕事に就くことを余儀なくされ、事を察知した一親族の努力なども空しく早死にすることになる。さらに父バルトロメオとほかの子たちの冷酷な関係が綴られる中で、父親の元を離れてサヴォナからローマに移動した、残された唯一の子の運命が明らかにされる。ローマ劫略遭遇である[58]。

ここでヴァレリアーノの著述は、最初からその役割の大きいメッリーニがコロッチとグラーナに向って言を発し、改めて本書の主題である学者の悲惨さの問題に立ち返る。暴力と掠奪が蔓延るなか、荒々しくとげとげしい社会的現状を指摘する。これに参集者の発言が行なわれる。コロッチは言う——メッリーニと同意見だ。今現存中の文学者より、不幸なことはなにもない。なるほど、昨日、コンタリーニは、われわれが不幸と呼

---

[54] Virginia Anne Bonito, *The Saint Anne Altar in Sant'Agositino, Rome*, Ph.D. 1983, University Microfilms International, Ann Arbor, Michigan. Simar, *op cit.*, 194-203. 根占『ルネサンス精神への旅』、112頁。
[55] 220-223.
[56] 222-227.
[57] 226-227.
[58] 226-233.

ぶのが常であった故人が単に不幸せでないばかりでなく、至福そのものであることを示した。だが、私、レリオ（Lelio)、ピンピネッラ(Pimpinella)、コルシが惨めであることをわれわれは納得していて、これが真実ごとでないと、コンタリーニも、プラトンも、ソクラテスも、エピクテトス自身も、われわれに決して納得させることはできないだろう、と[59]。

これに対し、メッリーニは自分が二人の兄弟ジローラモとチェルソを喪い、時間が経っても悲しみが消えないこと（既出）を述べる。コロッチは、ポッリオが学識あることより不運なことはこれ以上ないと繰り返し言っていたが、コンタリーニは、ポッリオが、学者が不運なのは、かくも多くの人たちが多事多難な生涯を送ったからと考えているのは、間違った考えであると指摘する。納得しないポッリオに、コンタリーニはさらに禍そのものが文学者にいかなる根拠ある力をも揮わぬという。これにもポッリオは賛同しかね、いかなる損害も彼らを痛めつけないのであれば、運命を嘆いたりはしないだろう。あるいはさもないと、文人が不当であるという主張を余儀なくされることになろうが、これは言うに憚れることだ、と。コンタリーニは、私が言っているのはそういうことでなく、不当な行動は無知なる人の領域であるからだと応える。それなら、悪しきことと考えるものを喜んでわれわれは拒否し、良いことで役に立つと見なすものを熱心に求めるわれわれすべては間違っているのかというポッリオに、善悪の考察は別の問題だとして、コンタリーニは言う――皆が悪と考える事柄がいかなる文学者をもなぎ倒して、再び心の平静さを取り戻せぬほどに力を揮えるものかどうか、またいかに大きかろうが、悲嘆と絶望にはいかなる救いの機会もないのかどうか、と。コンタリーニは敷衍する。不運がいかなる領域にあるか、学者や賢人の意見なのか、あるいは大衆の考えなのか、それともこれに苦しめられて嘆く者の判断なのか。学識者と無知な人の間では幸運と不運の捉えかたが異なる。無知な人が非難する事柄でも、賢者は悪と見なさず、それどころか魂の平安に至ると宣言さえする。そしてしまいには、われわれも自身について、また自分のことについて謬つ。われわれは不運の損害を避けることのできる真の原理を見出していない。かくしてわれわれは無知である。ある事柄が自分の力のなかにあるか、それとも他人のその中にあるかどうかが問われる。コンタリーニは言う――意志のみがあなたたち自身のうちにあり、ほかのすべては他者にある。名誉、富、健康、名声、利得などは死すべき者たちの精神を不安な状態に絶えず置く。他者に属するものはあなたたちには何事でもない。それらはあなたたちの力の中になく、神に属するか、人に属するかだ。もしもそれらが、欲したにもかかわらず、あなたたちに届かず、所有したと思

[59] 232-235. レリオ、ピンピネッラの名もこれ以前にはない。

ったにもかかわらず、奪い去られるにしても、あなたたちがこのことを嘆き悲しむことを欲しているかどうかはあなたたちの力の中にあるのだ。しかるに他の誰かの力の中にあるものについて嘆き悲しむことを欲することは、自らに損害を与えることである。それ故に、不運であることを欲しないなら、人は不運ではない。この点に関してはエピクテトスが多くを語っている、と[60]。

コンタリーニの主張に対し、今度はコロッチが発言する。コンタリーニの見解は理想的であるにしても、実際にはそのような人物はいない。マルクス・トウッリウス・キケロも、ホメロスのオデュセウスも、ウェルギリウス・マロのアエネアスも不運を嘆き、不満を託ち、感情的になった。それゆえ、人間的不運に動揺させられないなら、それは獣的であり、石同然であり、あらゆる感情に欠けている、と。これに対し、コンタリーニはやはり悲惨な事柄がある人には命とりでも、他の者にはそうではないとして、何事にも煩わされず、平穏な生を送ったベッルーノのウルバーノ・ヴァレリアーノの名を挙げる。ウルバーノはピエリオの父ロレンツォの兄弟でフランチェスコ修道会士であった。以下詳細に、彼の疲れを知らぬ旅の数々、度を越えない生活の清貧さが讃えられ、死に臨んでも笑顔だったと語り、仕合せな人生がいかにあるかを教える。亡くなったのは、クレメンス7世が教皇座に即位した初年度であり、84歳の頃であった。ある物で満足し、欠けているとは思わなかった[61]。

不遇と不興は知識人や無知な人かどうかを問わない。身分に関わりなく、運命に苦しめられる。学識者に災禍が相応しくないとでも言うのなら、それは人間らしくないということだ。わが友コロッチよ、この問題は学者、知識人に限定せずに人類の惨事として語られるべきであろう。だから、そのような人々の不運として嘆くのをやめよ。そのかわり、これに喜んで挨拶せよ、なぜなら運命の力に彼らは完全にはかき回されたりはしないから。労苦で自分のために不滅への道を開拓する者、崇める者のために永遠の命を確保するばかりでなく、自分のために不滅の記念碑を打ち立てる者について語ろうではないか。人に才ありといえども、神の助けなしにはそれは不可能なことであろう、と。ホラティウス、プロペルティウス、ユウェナリス、ルクレティウスの詩が引用されて、論拠が固められる。力や物の所持を冀う者はこれらを脇に置くことを厭うであろうが、人間的関心事の弱さを知った者にはますます、この生から去ることは一層心地よい[62]。

以下、エルモラオ・バルバロを皮切りに、昨日、不運、不幸と呼ばれた者たちの悲惨極まる死が、実はそうでないことが列挙されていく。——アウグスト・ヴァルドのよう

---

[60] 234-239.
[61] 238-247.
[62] 246-251.

に著作が残されなくとも、彼の記憶は別の人の証言のなかに生きている。死すべき肉体よりも神的才を熱心に磨いたポエブスの神官たち、ムーサイたちの秘蔵子たちを歓呼せよ。われわれはこの世に生きている間は、世を去りし彼らの精神に敬意を表わし、その労が絶えることを許さないであろう、と[63]。

最後に議論から離れ、コンタリーニのコロッチへの言として、イタリアの政治状況が伝えられる。クレメンス７世の危うかった健康状態も見込みが立ち、カール５世との間に平和をもたらすべく、皇帝をイタリアに招くことが決定された。こうして現在の惨状に終りが来、禍が消えてゆく秩序回復の期待感が高まる。コロッチとグラーナはパラティーナの庭園にあるポッリオ宅に赴き、さらに教皇のもとへ用事で行くことになる。二人が去った後、メッリーニ、ピエリオ、ピエトラサンタ、コルシ、カッタネオが夕餉を迎えた。

おわりに

以上がピエリオ・ヴァレリアーノの両巻の内容である。学者、学識者、知識人などとさまざまに訳し分けた言葉は、統一されてヒューマニスト（人文主義者）という訳語でも良かったであろう。『学者たちの不幸』はローマ劫略に巻き込まれたヒューマニストのみが議論の対象ではないものの、この事件の余波が主題的に扱われていることは確かであり、事件後のクレメンス7世に期待が懸かっていることも明らかになった。

各巻の登場人物中には名前のみの者も含めて、コンタリーニやコロッチ、ゴリッツやエジディオ・ダ・ヴィテルボ、そしてフェドラ・インギラミのように、さらにモノグラフで著わしたい「ローマ・アカデミー」関係者が控えている。特に、コロッチとゴリッツを討究することで、このアカデミーの内実とローマ・ルネサンスの実像に迫ることを今後の課題としたい。

後記。小論は、ルネサンス研究会（2009年７月４日本学。司会伊藤博明埼玉大学教授）にて、口頭発表した「ルネサンス・ローマのヒューマニストたち――アカデミーの面々」に基づく。なお本研究は、2009年度本学特別研究費（個人）の成果の一部である。

---

[63] 250-255.

（本学教授）